

森の自由人 125

狸泥舟

森林施業研究会 in 北海道

今年も森林施業研究会の合宿の季節が巡ってきた。10月1日からだから、ちょうど紅葉が見ごろかと期待していたのに、まったく色気はなかった。去年も北海道富良野だったので、写真を見てみたら色づいていた。10月28日だったから当然だが、それでも遅い。高校の時東北の十和田湖に修学旅行で行った。10月10日のこと、全山燃えるような紅葉だった。もはや古い人間になってしまった。

降り立ったのは旭川空港。ここから北に向いて士別^{しべつ}まで行き、そこから西向きに山越えした母子里^{もしり}、ここにある北海道大学雨龍^{うりゅう}研究林が今回のフィールドである。母子里は、日本一が3つある幌加内町^{ほろかないちよう}にある。日本一広い蕎麦畑^{しゆきりない}、朱鞠内湖は日本一広い人造湖、1978年2月母子里で日本最低の-41.2度を記録している。

非常に興味深い土地柄なのだが、もう1つある。私が最近読んだ日本鉄道廃線史（小牟田哲彦著、中公新書）に「代替道路の完成で廃止された深名線^{しんめい}」が登場する。深名線は、函館本線の深川から雨竜川を遡るように北上して、幌加内、朱鞠内、母子里を経由して、宗谷本



線の名寄に接続する全長122kmと結構長い。営業係数全国ワースト10の常連だったにもかかわらず、母子里から名寄まで線路に平行する代替道路が存在しないという全国唯一の事例で、長らく廃止の候補にもあがらなかった。その後ようやく名母トンネルの開通によって、バスの通行が可能になると、1995年に深名線は廃止された。

今では士別へつながる道路も開設されており、さほど難所と思える箇所もなく、難なく士別に出ることができる。

北大雨龍研究林

研究林は地図の赤線内にある。石狩川の支流である雨竜川源流域の2万5千haを占め、標高175～900m、針広混交の天然林が90%で人工林もすべて北海道産の樹種である。

研究林は1901年に設立され、母子里に庁舎が置かれ、研究林にかかわる人々によって集落ができていた。現在ではほとんど在住者はなく、名寄方面からの通勤のようである。



写真 1 北大雨龍研究林中心部

天然更新礼賛

今回の合宿のテーマは、企画者の意図はともかく、針広混交林と天然更新、シラカバの木材としてのデビューだと解釈した。私は、研究会終了後十勝南部の広尾町に移動して、史春森林財団の経営林見せてもらったが、これも含めて北海道における旺盛な天然更新力をまざまざと見せられた。シラカバをはじめとするカンバ類を筆頭に、ミズナラ、トドマツ、アカエゾマツ、国内外来種のカラマツに至るまで、北海道の山は、いや野に至るまで、萌えている。

今回は、深名線や愛国から幸福へで人気だった広尾線といった廃線に寄り添った旅でもあったが、その跡地はほとんどわからない。これこそ天然更新のなせる技なのだ。木々に埋もれた廃線と言いたい、廃線跡は絶好の天然更新適地であったのだ。

かねて私は天然更新論者である。それは、植樹をしてその植栽木の成育を妨げる雑草木を刈り払う育成林業では、その多大なコストを伐採収入で回収しきれないという、超単純な理由による。(本 HP「感じる森林学」第 2 章森林施業第 11 節採取林業と育成林業に詳述)



写真 2 更新前林相 シラカバ純林

天然更新であれば、苗木代 0、造林経費 0 である。もっとも天然更新の大敵であるササがあれば、掻き起しなどの処理が必要であるが人工更新(造林)とは比較にならない安さである。

天然更新のもう一つの利点は多様性である。今回見た北海道ではシラカバの優先が光っているが、他の広葉樹も針葉樹も同時に更新する。人工更新の下刈や除伐はこのような多様性を消し去る行為だと気がつけば、何と勿体ないことか。金をかけて商品価値を減じ

ているのだ。

雨龍研究林で学んだことは、いずれ森林施業研究会のホームページに参加者の感想が寄せられるので、それを見ていただければよくわかる。ここでは私が気がついたことだけ述べるとしよう。

ササ処理が絶対的な前提となっていて、ササ処理の方法論がスタートになっているが、私と



写真 3 掻き起し施工 8 年目の更新状況 主にシラカバ

してはササ処理も省略したい。バックホウのショベルで行っている掻き起しが大した負担でないとしても、更新樹木が多すぎて除伐や間伐が必要になるのであれば、掻き起しも手抜きして成立本数を減らす方法もあると考える。

かつて白神山地の外縁部のスギ人工林を皆伐してブナを植栽した箇所では、ほとんどブナが成育せず、シラカバが適度に侵入していたのを思い出す。ササの薄いところに侵入したシラカバが立ち上がって、比較的低い密度で成林すれば余分な手入れが必要ない。

ササ枯れ

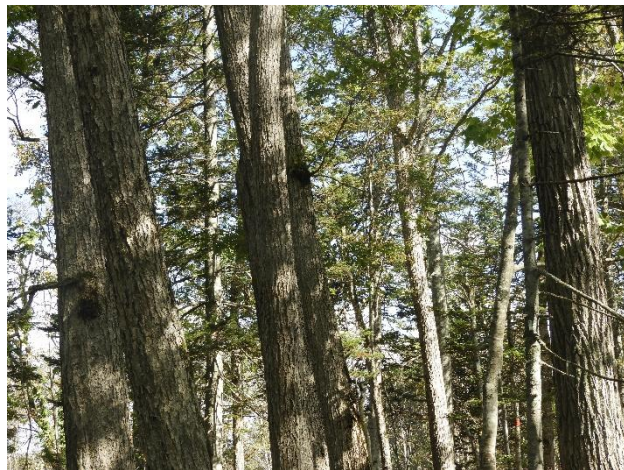


写真 4 ミズナラ純林

なかなか正解を得られない。

シラカバの種子は綿毛のようで、風散布で広域に広がるが、ミズナラはドングリなので落下と鳥や小動物による運搬で散布され、その範囲は限られている。このミズナラ林の林床のササが枯死していた。ササの開花は 130 年に 1 度とも言われ、開花したあと枯死する。青々と林床をびっしり覆っていたササが枯死すると、それまで抑圧されていた上木の

ミズナラの純林を見せてもらった。利用価値の高い樹種で、昨年の東大富良野演習林では単木で管理して、安定的な収入源にしていた。

ミズナラを天然更新できるのならば、シラカバよりも高い林業収入を期待できる。もっともパイオニア種であるシラカバは寿命が短く、伐期も 50～100 年と短い、ミズナラは長伐期にしたい。この伐期の違いを考慮すれば、どちらが林業的に有利であるかは、な



写真 5 林床のササ

稚樹などが光を浴びて一斉に立ち上がる。100 年に 1 度の大チャンス到来だ。

もちろんササの種子も一斉に発芽するが、針葉樹も広葉樹の稚樹も負けずに上へ伸びていく。100 年単位で待てない人間たちは掻き起しだの何だのと小技を使いたがるが、悠久に委ねれば更新のチャンスは巡ってくるのだ。



写真 6 ササ枯れ



写真 9 ミズナラの稚樹



写真 8 ササの花



写真 7 森林施業研究会 この樹に集え 大団円

待ちの林業の具現化

「多様な商品を揃えて時を待て」というのが、私の林業経営哲学であるが、今まで材質が劣るとされて商品化されていなかったシラカバのデビューがその証明である。

白樺プロジェクト

<https://shirakaba-project.jp/pg153.html>

現代の林業が出口のない隘路^{あいろ はま}に嵌っているのは、結果を急ぎ過ぎるからである。時間軸を無視しているからだ。林業経営において、時間の経過によって得られることは多い。材の品質の向上、需要動向の変化、周辺技術の進化。逆に時間の経過と相性の悪いものは、無駄な投資、無用な手入れ、性急な利益の追求、硬直的な思考であろう。

ゆったりと将来を見渡し、手広く構え、多様性を楽しむ。これが森林経営の極意ではないだろうか。

中公新書の「帝国陸軍—デモクラシーとの相剋」（高杉洋平）を読んだ（その2）

大正デモクラシーとアンチ・ミリタリズム

平和主義、民主主義を賛美する世界的潮流は、日本において明治末から昭和初期かけての大正デモクラシーという民主主義を謳歌する世相を生み出す。これは権威主義、軍国主義の象徴とみなされた軍部を非難するアンチ・ミリタリズムの社会風潮をとして噴出する。

民衆は、税金で無駄飯を食っていると軍服姿に嫌悪の目を向け、露骨に電車や道路で罵倒した。娘たちはもとより親たちも軍人と結婚させようとしなかった。軍人は軍服姿を恥じて、通勤には平服を着るようになった。

そのありようは都会と農村では違ったであろうが、現在の我々が思い浮かべる軍国主義的軍人とはかけ離れていて信じられない。テレビドラマのデフォルメは歴史の誤解を生む。

アンチ・ミリタリズムに対して、陸軍内で自己改革の動きが起きる。軍人の社会的常識の欠如、民主主義への批判的な認識、人権意識の不足などが自己批判の対象となった。軍事以外の教養を身につけるため、選抜した将校を帝国大学へ派遣して、一般学生とともに教育を受ける制度も拡充された。思想教育の必要性が議論されるようになり、自主勉強に励む将校も現れた。経済、金融、思想、果てはマルクス主義にまで及んだという。

兵営においても民主化が実施され、規律の緩和が目指された。隊内における暴力行為などを訴えることができる上申制度も整備された。野球やテニスといったスポーツも奨励された。

陸軍内における民主化が進んだ一番の要因は、曲がりなりにも世界平和が続いたことである。平和は、最も頑なと思われる軍人でさえもとろかすのだ。あらためてその重要性を感じるのである。

宇垣一成の軍縮

23 年に関東大震災が発生すると、予算的制約から陸軍の近代化はさらに困難となること
が確実になった。そこで参謀本部は近代化予算を捻出するために 4 個師団を削減する案に
踏み切った。ちなみに当時の師団数は内地 19 個+朝鮮 2 個だった。大臣に就任した宇垣一成^{うがきかずしげ}
は、まずその軍縮案に強く反対した 4 大将を予備役に追い込む。さらに、当時の加藤高明内
閣の 3 与党（憲政会、政友会、革新倶楽部）はそれぞれ急進的な軍縮案を掲げていたが、最
大の懸案は普通選挙の実施だった。宇垣はその間隙を巧みに突いて、師団削減分の予算を近
代化に転用できないなら白紙撤回すると脅しをかけ、4 個師団削減のみでも政党内閣の功績
に十分だとして、説得に成功した。

これによって航空部隊の増強、戦車隊の新設、火器の充実等が図られた。

それと並行して学校配属将校制度を導入した。旧制中学以上の官公立学校に現役将校を
派遣し、学生、生徒に軍事教練を義務付け、修了試験に合格した者に兵役の短縮や幹部候補
生の招集特権を与えるというものだ。戦時下の下級将校不足を補い、軍縮で余剰となった将
校をこれに充て、エリート学生に軍事知識を普及して軍隊に対する理解を深化させるとい
う国家総力戦への入口となる制度だった。

これら一連の改革の成功によって、宇垣の権威は陸軍内外で急速に高まっていく。

一方、宇垣は政党人として振舞った。陸軍大臣という現役武官であっても、政党内閣の構
成員だからである。政軍協調路線で、統帥権の独立の維持を基本として、政党と軍部のつな
ぎ役として、政軍双方の妥協点を見出し、余人に代えがたい存在となった。そのため内閣が
変わっても宇垣は陸軍大臣に留まり続けた。

陸軍近代化の挫折と精神論への傾斜

こうして宇垣は、師団数削減と引き換えに装備の近代化を達成したが、部内には次なる不
満が巻き起こる。近代化はなったとは言え、欧米列強との絶対差は如何ともし難いものだっ
た。飛行機は 500 機で欧米各国のおおむね 3 分の 1、戦車は 40 両で 5 分の 1 以下である。
欧米は大戦を生き抜く必要に迫られて生産された数が大きく、平時の日本の国力で追いつ
ける数ではなかった。

こうして非現実的な装備の近代化は諦^{あきら}めに変わり、それ代わるの軍事的合理性として精
神力への依存が始まる。今から見ればまったくの屁理屈であるが、こうした科学性の欠如が
やがては国を亡ぼす。

宇垣の下で近代化や総力戦体制構築などに参画していた永田鉄山^{てつざん}は次のように警告した。

「国が貧乏で理想の改革ができないのが、欧米と日本の差である。この欠陥を隠すために
抽象的文句をならべて精神力を鼓舞するのは止むを得ないことではあるが、これが実際の
ことと思ひ誤まることに注意しなければならない。」精神力では装備に勝てないといってい
るのだ。当時の陸軍には、このような科学的、合理的判断をできる者もまだいたのである。

現在にあっても、科学性を無視して情緒的な屁理屈（ウソ）を通すことがあるが、いつしか正論となって、もとの事情を知らない若手が堂々と主張しているのを見る。本当に赤面の至りである。

こうした安易な精神論が、無為に多くの兵隊を死に追いやることになる。

宇垣への失望と政党政治への不信

宇垣軍縮は、政軍協調路線という宇垣一流の立ち回りによって推進されただけに、近代化への諦めは宇垣への失望となった。陸軍内では、宇垣は政党寄りと目され、当の宇垣も政界進出の色気十分だったから、不信が高まっていった。

男子普通選挙の導入によって民衆の政治参加への裾野は大きく広がったが、同時に選挙には膨大な金銭が必要となり、金権政治が蔓延^{はびこ}った。不況が繰り返される不安定な経済状況で、体力のある財閥による寡占体制になった。農村では農家の収入は激減し、都市部に流入した非熟練労働者は低賃金に甘んじた。こうした著しい富の不均衡化は固定されたが、政党はこうした状況に適切に対応できなかった。金権政治は、政党と財閥の癒着を生み、政策は財閥の利益に沿ったものと見做された。政治資金に揺れる現在と瓜二つの状況ではないか。

こうした事態に陸軍は危機感を強めた。陸軍は徴兵制度によって一般社会と密接につながっており、特に農村は優秀な兵士の供給源だった。将校と下士官・兵とのつながりも濃密で、一般社会の窮状に危機感を覚えやすい土壌があった。

ちなみに海軍は、士官になれば士官専用食堂でボーイ付きで洋食を味わう貴族的な艦内生活で、下士官・兵とのつながりは希薄であった。兵士も30～50%が志願兵で、陸軍との質の違いは大きかった。よく海軍の方がリベラルに語られることが多いが、いろいろ状況が分かってくると、陸軍に親近感を覚えるようになった。

大正デモクラシーの初めには陸軍士官学校への志願者は大きく下落していたが、繰り返す経済恐慌による経済不況で、学費がかからず、公職への就職が保証されることから、志願者数は増加した。百姓や貧乏人の子でも陸軍士官になれば、飯は食えるし、社会的にはエリートである。

このような出自の軍人たちが金権政治に明け暮れる政党に不信を抱き、しかも参政権もないから、政治的不満を高めて行くのも当然の成り行きであろう。